

Roman Book

著者との話
合いにより
検印廃止

昭和36年12月20日 第1刷発行

昭和38年8月20日 第3刷発行

せん ごく ざん とう き
戦 国 残 党 記

¥ 270

著 者 なか やま ぎ しゅう
中 山 義 秀

発行者 野 間 省 一

印刷所 株式会社 常磐印刷所

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽町3ノ19

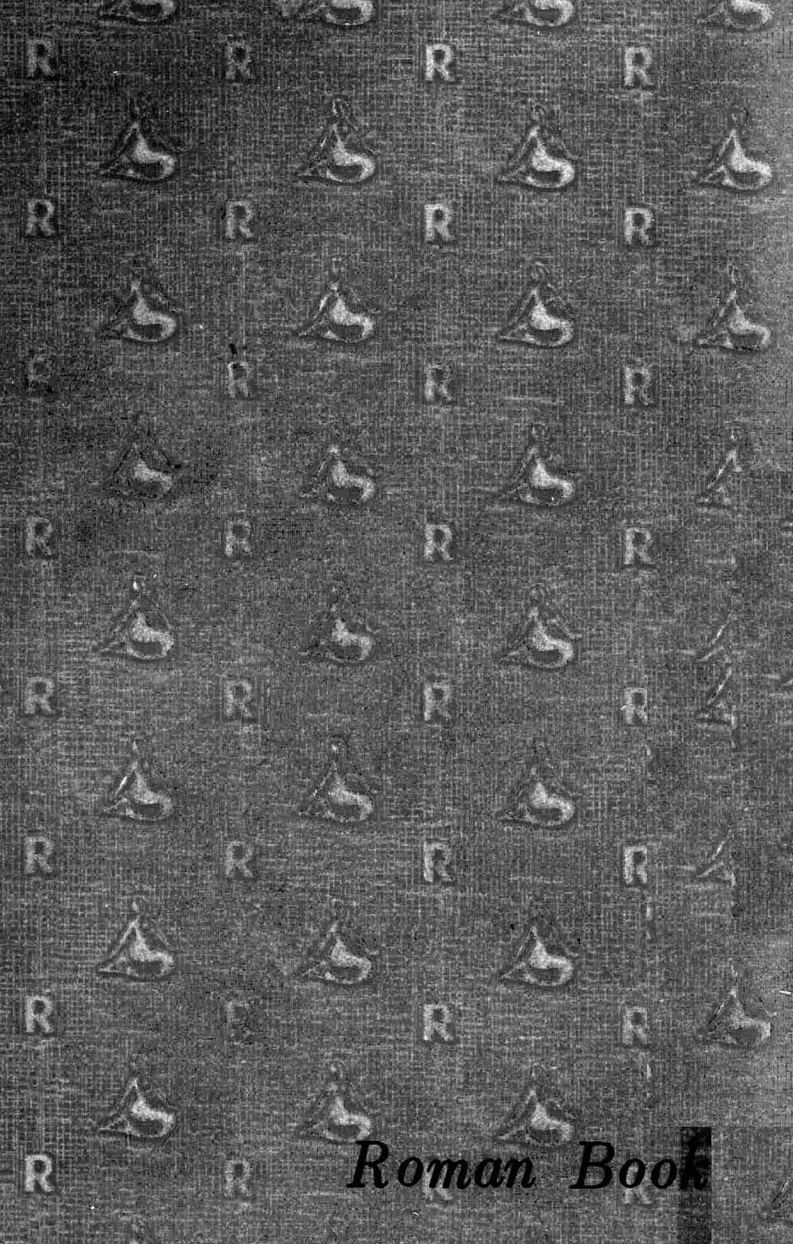
振 替 東 京 3 9 3 0

電話東京(941)3111(大代表)

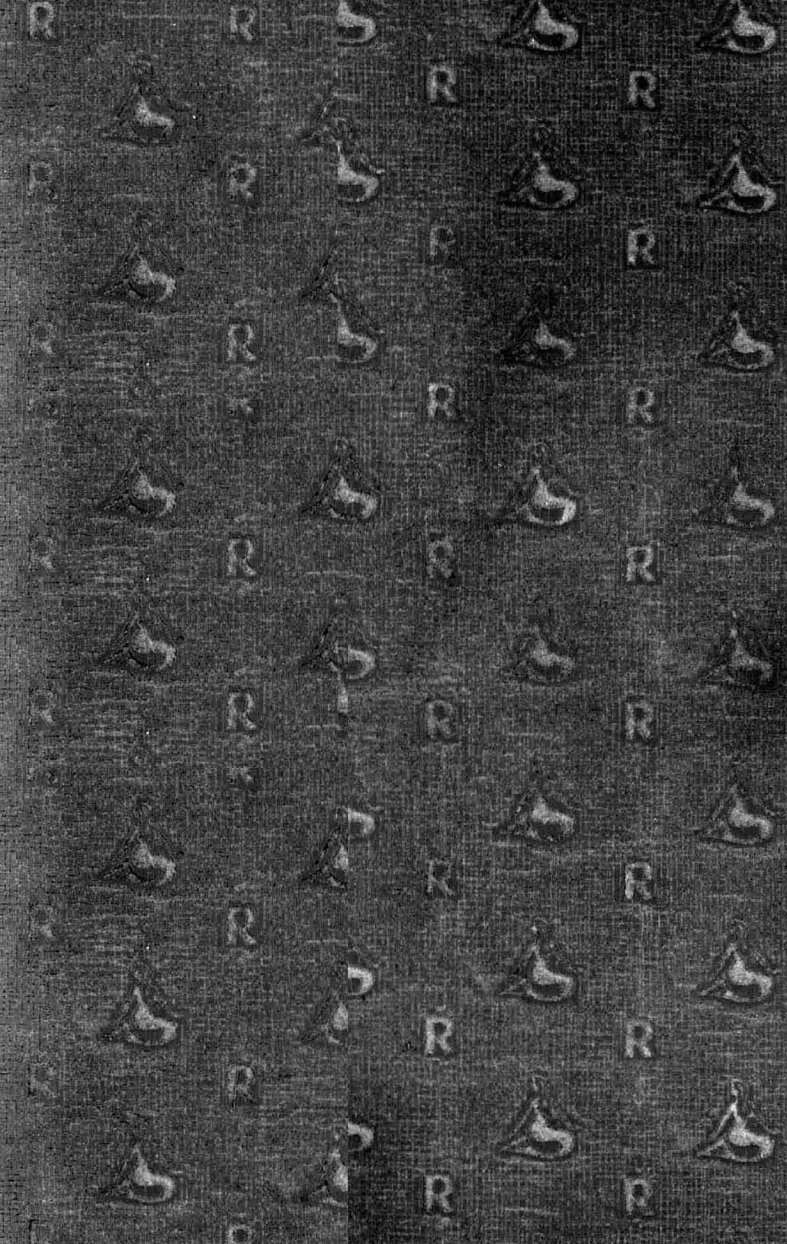
© 中山義秀 一九五八

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

(黒柳製本)

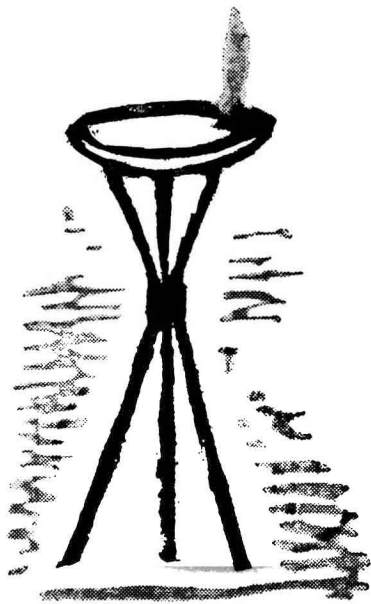


Roman Book



記 党 殘

秀 義 山 中



Roman Books

目

次

いたずら者	囚人	あらし	冬の旅	陥穽	駈落	千姫	再会	娘ごころ	東への旅
………	………	………	………	………	………	………	………	………	………
二六三	二五〇	二三九	三八	二七	二〇七	一九六	一八四	一七三	一六二

戦国殘党記

落武者

一

城が燃えている。町も燃えている。

元和元年五月七日、大阪落城のたそがれ時である。といつても、陽暦では六月三日の午後六時前、日暮にはまだ時がある。

天満をこえて、淀川長柄堤のほとり、高槻街道を馬にうちのり、北へ落ちてゆく武者があつた。

左手に馬の手綱をとり、右手に十文字の槍をにぎっていた。

槍の片鎌が折れ、紺糸緘おどしの具足に、かえり血をあびているところを見ると、よほど激闘をつづけたものらしい。

「おうい、おうい」

後から、武者が迫いかけてきた。鎧あゆみを馬のわき腹に蹴りあて、ひどく勢いこんでいる。落武者とみて、よ

き獲物と思つたのであらう。

その呼び声を聞きつけると、先の武者は馬をとめ、後をふりかえつてみた。

べつに、あわてて逃げだす風はない。うすづく斜陽の光を、半身にあびながら、せまつてくる敵の姿を見定めるかのように、じつと落着いている。

「大阪方の然るべき物頭と、見たはひが目か。本日の先鋒、松平忠直の手の者、岩谷主水なり、尋常にあたあわれい」

そう言われると、先の武者は素直に馬をおり、槍を地上に突きたてて、近づく敵を待っている。

桃形ももがたの兜をかぶり、面頬をあてているので、顔つきも年の頃もわからないが、背が高い。からだつきも、がっしりとしている。

追いかけてきた岩谷は、二十間ばかり先で、おなじく馬を下り、二間柄の大身の槍をかまえて、敵の前によつてきながら、

「名を、なのり候え。大阪方は誰の組にて、なんと申されるぞ」

相手は面頬の下から、異様な含み声を響かせて、「落武者に、名乗りはいらぬ。この首がとりたくば、余計ごとはおいて、早う突いてこぬかい」

まるで相手を、叱りつけるような調子である。敗戦

で、やけになっているのかも分らない。

岩谷は、むうっとして、

「ぬかしたな。さらばその首、討取ってくれよう」

岩谷が長槍を上げて、相手の脇つばを狙い、穂先をひらめかしながら、大喝一声、

「やあ」

と突いてかかると、敵は横なぐりに、それを払いのけた。

すかさず槍先をひいて、下段に敵の佩楯はいだての下を突くと、相手はすくいあげるようにして、穂先をはずしてしまう。

「こいつは、手ごわい」

岩谷は飛びかかって敵を突き、飛びさがって槍の構えをなおしている間に、次第に夢中になって、何もわからなくなり、なかば盲滅法、相手を槍でなぐりつけた瞬間、槍の塩首を相手の左手で、むずと押さえられた。

押してもひいても、どうにもならない。ぐずぐずしていると、右手に握られている敵の槍先が、自分の喉元にせまってくる。

二

「えいつ、面倒な」

岩谷主水は、押さえられた槍をはなすと、敵にむかつて、どうんと組みついていった。

主水は年は若いし、力も強い。あとさき見ずの無鉄砲さで、ぶっつかってくる。

「あいや」

相手は身体を右にひらくと、主水の袖の綿わた詰みをひつつかんで、前にひき倒した。組打ちにも、馴れているらしい。

主水は、たっ、たっ、たつと前に二、三歩たたらを踏み、両手をのばして、地面につんのめった。

その背中を、どしんと片足で踏みつけられ、そのまま膝でおさえつけられると、もう動けない。蛙の圧しつぶされたような、恰好である。

次に腰の馬手差しをひきぬき、兜をぐいと上にもちあげて、首を掻いてしまえば、それまで。

そんな風にして、今日一日の合戦に、首をとられた者が、敵味方あわせて、幾千幾万とある。

松平忠直のひきいる越前兵一万三千四百人、討取った敵の首数、真田幸村、御宿政友等をはじめ、三千七百五十級、これが徳川軍中の首のとり頭だ。

岩谷主水も朋輩にまけまいとして、天満川をおし渡り、長柄堤ながてつみのほうまで、獲物を追うてやってきたが、こんな敵に出会うとは、とんだ災難だ。

すでに城は落ち、戦は味方の大勝利に終つて、いよいよ凱旋という間際に、首をとられたりしては、浮かばれまい。

功にあせり、血気にはやった報いである。

主水は最後の死力をふりしほつて、敵をはねかえそうとしたが、背中を圧しつけている敵の身体は、びくともしない。

まるで、大きな巖根が、のつかっているみたいだ。

「松平忠直が手の者、と申したな」

敵が上から、声をかけた。主水は答えようにも、きびしくおさえつけられているので、声がでない。ただ「ううむ」と唸るばかり。

「まさしく、それに相違ないか」

背中を、ゆるめられて、

「な、名乗りに偽りはない」

「未熟者めが、此処で死んで、何とする」

敵は主水の首をとるかわりに、説教している。落武者に首はいらぬから、そんなことを、言ってみるのかもしれない。

「主の忠直に似て、うぬも大たわけだな」

敵は主水の背中から、膝頭をとると、彼をひきおこした。

「これに懲りて、はやく味方の陣にかえれ」

主水は思いがけなく、命を助けられて、嬉しくないことはないが、体裁の悪いことも又一倍だ。

ふたたび闘いをいどんでも、到底勝てる相手ではない。

自分の持槍を拾いとり、立木につないであつた乗馬の方へ、のしのしと歩いてゆく敵の後ろ姿をうつけたように見送っていたが、急に飛びあがつて後を追いかけて、

「暫く暫く、お待ち下され」

三

敵は馬の鐙に、片足をかけかけていたが、それをやめて後をふりかえり、

「何じゃな」

主水はその前方に、うずくまつて、

「お助け下されたお方の、お名前を承知いたしとう存じます」

「我が名を聞きおいて、後に訴えでると申すか」

「と、とんでも御座りませぬ。決して左様な懸念は：。ただお腕前といい、お人柄といい、あまりにゆかしゅう存ぜられますので、唯一人わが胸奥に銘記して、他日の誠めとなしたいものと心得ます」

主水は今も、すっかり敵の前に兜をぬいでしま

っている。相手がしかるべき豪傑だと思つと、敵味方の観念は、なくなるものらしい。

敵は主水のおとなしやかな態度が氣にいったものか、馬の方はそのまま、主水の前へひつかえしてきて、「名ばかり聞いておいても、仕方があるまい。顔も見知つておけ」

彼が面頬をはずし兜をとると、乱髪を鉢巻でとめた白面の青年、齡はまだ二十二、三歳であらう。

場馴れした闘いぶりから察して、大阪方でも名のあつる大剛の侍と想像していた主水にとっては、これほど驚かれるような若きであつた。

ことに、主水自身とあまり年が違わないとわかると、子供あつかいされただけ、彼の驚きは大きい。

「孫次郎忠雄ただかつじゃ。忠直の手の者ならば、聞き知つてもおろう」

「えッ」

主水はのけぞるばかりに驚き、相手の顔を熟視して、こんどは「はっ」とばかり、大地に両手をついて畏つた。

「先君の御落胤様、存ぜぬこととは知りながら、御無礼を仕りました」

それぎり、頭があがらない。

主水が先君と言つたのは、徳川家康の第二子、結城

中納言秀康。

天正十二年豊臣秀吉にもらわれてゆき、十八年結城左衛門督晴朝の養子となり、関ヶ原役後松平と姓をあらためて、越前北の庄六十七万石の城主となつた。

剛毅果斷の大將だつたが、弟の秀忠が將軍になつたので、世の中が不平でならない。

乱行をきわめて、手当りしだい女に手をつけ、方々に落胤をつくつた。孫次郎はその一人、年の上からいえば、当主松平忠直の兄にあたる。

秀康には子供が多勢あつたから落胤までには手はおよばない。

孫次郎は秀康の母お万の実家、永見氏にあずけられていたが、慶長十二年秀康が三十四歳で亡くなつた後、永見氏の家を出て、秀忠に仕えるようになった。

おもてむき秀康の子になつていないから、大名にはとりたてられない。いづれ徳川の旗本になる身の上だが、それがどうして徳川の手をはなれ、敵の大阪方についたりしたのであらうか。

四

孫次郎の境遇は、父の結城秀康と似ている。ともに下賤な女の腹から生まれて、弟に跡をとられた。

孫次郎のほうが、父よりもっと歩が悪い。父はとも